

サイクロトロン円運動の波動関数 — コヒーレント状態の応用

z 方向の一様な磁場 B を表すベクトルポテンシャルは, a を任意の実数として

$$A_x = -aBy, \quad A_y = (1-a)Bx, \quad A_z = 0 \quad (1)$$

与えられ, 特に $a = 1$ の場合をランダウゲージ, $a = 1/2$ の場合を対称ゲージと呼んでいる。

質量 m , 電荷 q の荷電粒子のハミルトニアンは

$$P = p_y - qA_y = p_y - (1-a)qBx, \quad Q = \frac{1}{qB}(p_x - qA_x) = ay + \frac{1}{qB}p_x \quad (2)$$

と置くと, a の値が何であっても 1 次元調和振動子の形,

$$H = \frac{1}{2m}(\mathbf{p} - q\mathbf{A})^2 = \frac{P^2}{2m} + \frac{m\omega^2 Q^2}{2}, \quad [P, Q] = -i\hbar, \quad \omega = \frac{qB}{m} \quad (3)$$

に表すことが出来る。($q > 0$ としている。) したがってエネルギー固有値は

$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right) \hbar\omega, \quad n = 0, 1, 2, 3, \dots \quad (4)$$

与えられ, ランダウ準位と呼ばれている。 $\omega = qB/m$ はサイクロトロン周波数である。

ここで一つ前のノート (雑書庫 [210]) にあるコヒーレント状態の波動関数 (波束)

$$\Psi_\alpha(Q, t) = e^{-|\alpha|^2/2} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\alpha^n}{\sqrt{n!}} \psi_n(Q) e^{-iE_n t/\hbar}, \quad \alpha = |\alpha| e^{i\phi} \quad (5)$$

を構成する。 ψ_n は「座標 Q 」表示での固有関数である。簡単のため, 以後では α は 正の実数 とする。前のノート [210] の (17) により期待値は

$$\langle Q \rangle = \sqrt{\frac{2\hbar}{m\omega}} \alpha \cos \omega t, \quad \langle P \rangle = m \frac{d}{dt} \langle Q \rangle = -\sqrt{\frac{2\hbar}{m\omega}} m\omega \alpha \sin \omega t \quad (6)$$

である。

$$\dot{x} = \frac{\partial H}{\partial p_x} = \frac{p_x - qA_x}{m} = \frac{qBQ}{m}, \quad \dot{y} = \frac{p_y - qA_y}{m} = \frac{P}{m} \quad (7)$$

の関係を用いて書き直せば

$$\langle v_x \rangle = v \cos \omega t, \quad \langle v_y \rangle = -v \sin \omega t, \quad v = \sqrt{2\hbar\omega/m} \alpha \quad (8)$$

となり, 同じく (18) により不確定性 (揺らぎ) は両成分とも $\Delta v = v/2\alpha$ である。これを積分して

$$\langle x \rangle = x_0 + R \sin \omega t, \quad \langle y \rangle = y_0 + R \cos \omega t, \quad R = v/\omega = mv/qB \quad (9)$$

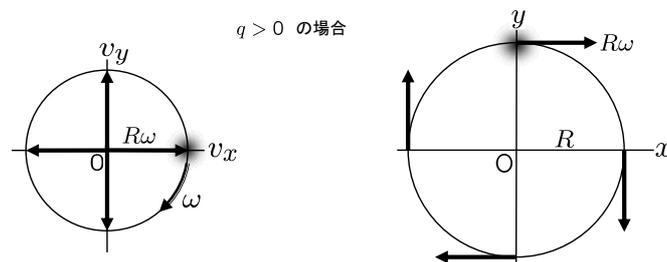
が得られる。 x_0, y_0 は任意の積分定数である。実際,

$$x_0 = x + v_y/\omega = x + (p_y - qA_y)/qB, \quad y_0 = y - v_x/\omega = y - (p_x - qA_x)/qB \quad (10)$$

と置くと, $[H, x_0] = [H, y_0] = 0$, すなわち, x_0, y_0 は保存量である。これを用いると,

$$x - x_0 = -P/qB = -P/m\omega, \quad y - y_0 = Q \quad (11)$$

となり, 上の結果が得られる。コヒーレント状態の波束の広がりから, $\Delta x = \Delta y = \Delta v/\omega = R/2\alpha$ である。 $\alpha \gg 1$ のとき荷電粒子を表す波束は, 磁場 B を減らす円電流となるような向きに円運動する (反磁性: $q > 0$ なら xy -面上で時計回り)。



さらに、運動エネルギーの期待値は

$$\frac{m}{2}(\langle v_x^2 \rangle + \langle v_y^2 \rangle) = \hbar\omega \left(\alpha^2 + \frac{1}{2} \right) = \hbar\omega \left(\langle n \rangle + \frac{1}{2} \right) \quad (12)$$

となる。(…)の中の1/2は、この場合は速度成分の不確定性から生じる。

波束の波動関数 先ほどの波束の議論は簡単であるが、難点は x_0, y_0 が c 数ではなくて演算子であることであり、得られるのは $y - y_0$ (あるいは $x - x_0$) の波束である。「(11) で、それぞれ特定の固有値 x_0, y_0 を選んで…」としたいところだが、 $[x_0, y_0] = -i\hbar$ と非可換なため、同時に固有状態になることはない。波動関数の具体的な形を求めて結論を確認しておこう。

コヒーレント状態の波動関数 (5) は、 $s = (2m\omega/\hbar)^{1/2}Q$ を用いれば

$$\Psi_\alpha \propto \exp \left[-\frac{1}{4}(s - 2z)^2 + \frac{z^2}{2} - \frac{\alpha^2}{2} - \frac{i\omega t}{2} \right], \quad z = \alpha e^{-i\omega t} \quad (13)$$

である。(前のノート [210] の (13) 式: α は正の実数とする。) $qB = m\omega$ を用いて変数 s を

$$s = \sqrt{\frac{2}{m\hbar\omega}}(p_x - qA_x) = \sqrt{\frac{2\hbar}{m\omega}}k_x - \sqrt{\frac{2}{m\hbar\omega}}qA_x = \kappa - \mathcal{A} \quad (14)$$

とおき、無次元化した「波数」 κ についてフーリエ変換¹すれば、

$$\begin{aligned} \hat{\Psi}_\alpha(\xi) &= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_{-\infty}^{\infty} \Psi_\alpha e^{i\kappa\xi} d\kappa \\ &\propto \exp \left[-(\xi - \alpha \sin \omega t)^2 + i \left((\mathcal{A} + 2\alpha \cos \omega t)\xi - \frac{\alpha^2}{2} \sin 2\omega t - \frac{\omega t}{2} \right) \right] \end{aligned} \quad (15)$$

となる。ベクトルポテンシャル A_x に由来する(変数 y を含む) \mathcal{A} の項は虚数部、すなわち位相に影響するだけである。以上より、 ξ の確率分布はガウス型の

$$|\hat{\Psi}_\alpha(\xi)|^2 d\xi = \sqrt{\frac{2}{\pi}} \exp \left[-2(\xi - \alpha \sin \omega t)^2 \right] d\xi \quad (16)$$

したがって

$$\langle \xi \rangle = \alpha \sin \omega t, \quad \Delta \xi = \frac{1}{2} \quad (17)$$

となり、 $\kappa\xi = k_x x$ により

$$\langle x \rangle = \sqrt{\frac{2\hbar}{m\omega}} \alpha \sin \omega t = R \sin \omega t, \quad \Delta x = \frac{1}{2} \sqrt{\frac{2\hbar}{m\omega}} = \frac{\Delta v}{\omega} = \frac{R}{2\alpha} \quad (18)$$

が得られる。

y については、 Q に対する波動関数を、先ず Q についてフーリエ変換して P に対する波動関数に変換することにより、同様の結果が得られる：

$$\langle y \rangle = R \cos \omega t, \quad \Delta y = \frac{\Delta v}{\omega} = \frac{R}{2\alpha} \quad (19)$$

¹ この変数 ξ の原点は任意である。このとき選ばれた $\xi = 0$ が、後で得られる振動(円運動)の中心 x_0 を与える。なお、指数関数を $e^{-i\kappa\xi}$ ではなく $e^{+i\kappa\xi}$ とするのは、以下の理由による：運動量 $p = -i\hbar d/dx$ の固有値 $\hbar k$ の固有関数は e^{ikx} だから、 p 表示での波動関数 (= この固有関数で展開したときの p 成分の係数) を $\psi(p)$ とするとき、

$$\hat{\psi}(x) = \sum_p \psi(p) e^{ipx/\hbar} = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_{-\infty}^{\infty} \psi(\hbar k) e^{ikx} dk$$